



ふじわら こはる ちゃん
(5さい)

かきこおりやさんに なりたいな。おすすめはりんごあじの かきこおり。ほかにも イチゴやメロン ブルーハワイのかきこおりをつくるの。



川湯保育園のおともだち



たかもと はな ちゃん
(5さい)

くるまが だいすき。とくに、あかい くるまがすきな。くるまやさんになって かっこいいくるまや かわいい くるまを うりたいな。

がんばっているあなたがすき

シリーズ・ひと

古来からの日本の美しい言葉を大切に
短歌の「小田観蜚賞」を受賞した

佐藤 幹子 さん(76歳・朝日2)



月光の一矢に刺され霜月の庭にダリアの緋衣裂ける
(受賞作から)

短歌結社「新壑社」の今年度の「小田観蜚賞」に選ばれた佐藤さん。初めての応募での快挙です。この度の第37回小田観蜚賞は、小田観蜚先生が1930年に新壑社を創立してから80周年の、記念の応募でした。1966年から新壑社の同人となり、以来毎月欠かさず投稿してきましたが、賞への応募は初めてです。受賞できるとは思っていませんでした。受賞の知らせには大変驚きました。

応募者の中から、最終選考に残ったのは18人。その中から、佐藤さんを含め2人が小田観蜚賞に輝きました。

「同人全員が年間60首出詠することが原則となっていて、賞へ応募する際は、その中から30首を自選し、応募します。30首一連の流れを考えながら、クライマックスに向けて構成していくことは、根気のいる作業でした。」

こうして応募したのが「朱の湿原」と題した30首。道東の厳しい自然が表現されています。

「小田先生がスローガンに掲げるところの『生命感的叙情』に少しでも添えるよう、常に心に置いて作品作りをしております。北海道の中でも特に厳しい道東の自然を、そしてその情景の中に自身の内面を折り込みながら、推敲に推敲を重ねて1首を成立させております。」

佐藤さんの短歌は、情景が鮮やかに浮かんできますが、内面も折り込まれているのですね。

「短歌1首1首が一つのドラマですから…。情景だけを詠むのは、作品を作る上での一つの方法論だと考えております。私は、その情景に心を置くことを忘れません。」

さらに心がけていることがあるそうです。

「古来からの美しい日本語を大切に、ということ。最近、特に若い人たちの間で言葉が乱れていると感じます。日本語はとても美しい言葉ですから、なくすことなく、次の世代の人たちにつないでいきたいと思っています。また、若い人たちにも言葉をお勧めしたいと思っています。短歌に親しむというのは、そういった点でもいいことかもしれません。」

佐藤さんが目指すこれからのことについて教えてください。

「中学生のころから短歌に親しんできました。作品を生み出すときにはつらさも苦しさもありますが、好きだからこそ続けてこられました。また、好きなことを応援してくれる周囲の応援も力になりました。これからも、頭と体の続く限り続けていきたいと思っています。」



しらかば合唱会

代表・江口 佑子 さん
会員・19人



しらかば合唱会の皆さん
前列右から2人目が代表の江口さん
前列右から3人目が堀先生、同4人目が吉口先生



練習の様子

「皆さん歌が大好きで、歌い終わるとすっきりしたとおっしゃいます」と話すのは、代表の江口さん。「何かの都合で合唱をお休みしなければならなくて、その後復活されたようなきには、ありがたみや楽しさがより増すようです。ですから長続きしているのしょう」とも話していました。実際、長く続けている会員さんが多いとのこと。

そんな皆さんの願いが、会員が増えること。「人数が増えれば、歌の幅や興行きも広がると思っています。歌が好きな方はぜひ、お気軽に参加してみませんか」とのことです。

興味のある方は、江口さんは、江口さん ☎482・2765までお問い合わせください。

まず初めに、準備体操で体をほぐし、次に発声練習。念入りに音を合わせながら曲の練習へ…。先生のきびきびした指導の下、練習に臨む姿は真剣そのもので

すが、和やかなムードも漂い、笑顔もこぼれます。

今回お邪魔したのは、しらかば合唱会。結成31年目を迎える合唱のサークルです。練習は金曜日の19時30分から、月に3回程度活動しています。指導するのは吉口教子先生。昨年からは堀祐美子先生が加わり、2人体制での指導となりました。